

## 4 日目：釜石市・陸前高田市での被災地状況視察、交流活動

宿泊研修最終日、大槌町に別れを告げ釜石市へ向かいました。釜石駅から三陸鉄道の「震災学習列車」に乗り、海岸線を南下して大船渡市の盛駅で下車、バスで陸前高田市の震災遺構を巡りました。「奇跡の一本松」など震災の記憶をたどった参加者たちは、4日間で積み重ねた体験を思い返しながら東京への帰路に着きました。

### 三陸鉄道「震災学習列車」

三陸鉄道南リアス線 釜石駅→盛駅

北リアス線（久慈～宮古）、南リアス線（釜石～盛）から成る三陸鉄道（以下「三鉄」という。地元での通称。）は、震災で壊滅的な被害を受け、全線運転不能に陥りました。しかし、わずか5日後に北リアス線・陸中野田～久慈の運転を再開し、震災復興支援列車として無料で運行して、復興のシンボルとして住民を支えました。

特に被害の大きかった南リアス線では自衛隊による瓦れき除去作業「三鉄の希望作戦」を経て、全線が復旧したのは震災から3年あまり経った平成26年春でした。

車窓にリアス式海岸を眺めながら、地震と津波の被害、復興の様子をパネルなどで解説していただきました。

ある車両は吉浜駅近くのトンネル内を走行中に揺れに見舞われ、そのまま緊急停車しましたが、ほんの3分ほど前後していれば、川を渡る鉄橋上で津波に巻き込まれていました。間一髪で津波から逃れ、乗員乗客を守った「奇跡の車両」と呼ばれ、今も現役で走っています。

三陸駅付近では、3階建ての小学校が最上階まで浸水するなどし、海側の低い土地は更地のままです。およそ80の方が犠牲になったこの付近で停車し、参加者は

黙とうを捧げました。

浦嶺<sup>ほれい</sup>駅の付近では、線路を挟んで陸側にだけ家屋が残っていることが特徴的でした。線路より海側では、防潮堤を乗り越えた津波に流されてしまいました。三鉄が年間1億円もの赤字を出しながらも復旧が決まった理由の一つとして、線路がこのように第二の防潮堤の役目を果たしたことも、大きな要素となったようです。

終点の盛駅にはJRのBRT（バス高速輸送システム）の停留所があります。大船渡線（気仙沼～盛）の廃止によるもので、厳しい現実を物語ります。困難を乗り越えて住民に寄り添う三鉄に、いつまでも走り続けてほしいと願い、参加者たちは電車を降りました。



三陸鉄道  
山蔭 康明氏 佐々木 光一氏



## 語り部バス（陸前高田市）

東日本大震災追悼施設→陸前高田復興まちづくり情報館→旧下宿定住促進住宅→旧道の駅高田松原→奇跡の一本松→旧気仙中学校

陸前高田では、陸前高田市観光物産協会「未来へ語り継ぐ陸前高田」の語り部ガイド、新沼岳志氏（会長）、河野正義氏及び佐々木武雄氏からお話を伺いました。東日本大震災追悼施設と陸前高田復興まちづくり情報館を訪れ、バス車内から震災遺構として保存されている旧下宿定住促進住宅、旧道の駅高田松原、奇跡の一本松、旧気仙中学校の4か所を巡りました。

車窓からはかなり広範囲が見渡せますが、家屋らしきものは見当たりません。ガイドは震災時の状況から始まりました。市の中心部にあった4階建ての県立高田病院では最上階まで浸水し、屋上に百数十人が避難するが、雪の降る中、救助を待つ間に低体温症で亡くなった人もいたなど、多くの犠牲者が出た痛ましい話でした。



バスを降りて東日本大震災追悼施設に向かい、全員で黙とうを捧げました。施設の外は、海を臨む“かさ上げ地”です。以前はにぎわっていたこれだけの広大な土地に、今は廃きょと工事車両しか見えないことに、津波の恐ろしさをまざまざと見せ付けられる思いでした。

続いて、陸前高田復興まちづくり情報館で、パネルやジオラマを用いた説明を受けました。震災前後の写真を比べると、建物が密集していた地域が震災後は海になっています。地震で1m近く地盤沈下し、津波で軟弱に



なった土砂が引き波で大量にさらわれたようです。

津波常襲地帯と言われた地域では、コンクリート製の防潮堤も跡形なく、人的被害も突出しています。防潮堤を過信して避難しなかった人が多かったといいます。

また、市内の犠牲者およそ1,800人の内、津波の規模に対応していない指定避難所で亡くなった人が300から400人と多いことも指摘し、行政も市民も防災意識を高めるべきだったと反省しているという話でした。

最後に語り部の河野氏は、新沼氏の「人の作ったものに頼ってはいけない。心の防潮堤を高くしてください。」という言葉を引き、「8月は戦争のことがよく話題に上がるが、戦争をしてはいけないのと同じように、震災も絶対に忘れてはいけないこと。心に残ったことをぜひ周りの人に伝えてほしい。」と語り掛け、参加者はしっかりと受け止めていました。



参加者感想（宿泊研修 4 日目）

●三陸鉄道「震災学習列車」

鉄道から見える風景は、震災が起こる前よりも家が極端に少なくなっており、津波の被災を物語っていた。	生徒
列車で回ることによって、複数の地域を一度に比較することができた。津波が襲来した所に家を再建した地域、建てなかった地域の差がはっきりと分かった。	生徒
改めて岩手の町全体を上から見て、災害で失われたものを取り戻すのはとても時間がかかることなんだなと思った。	生徒
津波の伝承の話が記憶に残っている。東京もいずれ大きな災害に見舞われて津波の被害を受けるかもしれない。今まで安全だから大丈夫という考えは捨てて、一人一人が日頃から防災に対する意識を磨いておかなければならないと感じた。	生徒
車掌は「またこの電車に乗ってほしい。何とかして多くの人に来てもらいたい。」とおっしゃっていた。人が増えないと、活気も戻らず、復興にもつながらないことを感じた。	生徒
復興を成し遂げるためには、被災地の人以外の力も必要であり、そのために様々な工夫をし、被災地に来てもらえるよう努力していることが伝わってきた。	教員
車窓から見る町には石碑がいくつもあり、そこには過去の災害の記録など、当時の人が未来へと伝え残したい記録が示されていることを知った。普段生活する場所にも、なんとなく見過ごしていた石碑があったと思う。どのような内容なのか確認してみる必要がある。	教員

●語り部バス 陸前高田市 被災地状況

屋根まで上って助かった人も3月の寒さの中で低体温症で亡くなったり、病院が使えず亡くなった方もいた話を聞き、対策すべき課題の多さに、災害の恐怖を感じた。	生徒
奇跡の一本松を見るのを楽しみにしていたが、離れた場所からの見学で残念であった。しかし、語り部ガイドの「徒歩でしか一本松の近くに行けない。もし、地震が発生して津波が来てしまったら、一本松の近くからでは避難が間に合わない。」という言葉がとても重かった。	生徒
現地の中学生が通っていた学校が津波の影響で実物とは違う姿になってしまい、彼らのショックは大きかったと思う。そのような方への心のケアも重要なのだろうと思った。	生徒
少しずつ生活が見えてきて、人々に日常が戻っているように思った。一方、まだ仮設住宅住まいで不安を抱えている方もいることを聞いた。7年経った今でも、震災で負った傷を抱え日々生活しているということ、少しずつ笑顔を取り戻しているということを学んだ。	生徒
「人の作った物に頼ってはいけない、心の防潮堤を高くしてください。」という言葉が印象に残った。自然災害を無くすことはできないので、可能な限り被害を減らす減災の取組が大切だと思った。	生徒
一本松の保存について、ニュースで見た時は疑問をもっていた。しかし、現地においては復興の象徴、そして貴重な観光資源として意義あるものだと分かった。	教員
一本松は有名で、ある人からすれば「希望の一本松」に見えるが、別の人からすれば「あの美しい松林が」という見方になり、同じ風景でも見ている人によって感じ方が異なることを学んだ。	教員